

# 「コロナ禍の変化を乗り越える」



公益財団法人七十七ビジネス振興財団

代表理事 鎌田 宏

新年あけましておめでとうございます。

皆様には2021年の新春を健やかに迎えのことと存じます。本年は明るく幸多い年でありますよう心よりご祈念申し上げます。

オリンピック・パラリンピック開催の期待を胸に始まった2020年は、年初には予想もしなかった新型コロナウイルス感染症の急拡大により、社会全体が大きな変化の波にさらされた1年となりました。

感染拡大防止のため世界各国がヒトやモノの動きを遮断した結果、あらゆる需要が一斉に消失し類例のない景気悪化につながり、東京オリンピックも1年延期されるなど経済や社会のあらゆる分野に様々な影響を及ぼしました。

私たちの日常の生活そのものが見直されることとなり、仕事のスタイルもICT（情報通信技術）を活用したテレワークやZoom等アプリを使った会議開催等により勤務場所にとられない柔軟な勤務体系が普及したほか、生活面でも外食や旅行などの外出型消費が激減する一方、家の中で楽しむ巣ごもり消費が活発化するとともに、ネット通販や動画配信サービスなどのデジタル消費の流れが加速するなど新たなライフスタイルが定着するきっかけとなりました。

今後、新型コロナウイルスと共生する時代を迎え、ますます社会の変化は加速し、ITの活用やDX（デジタルトランスフォーメーション）は否応なく我々の身近なものとなり、ITの社会実装が急激に進むものと考えられます。

医療体制の拡充やワクチンの開発等により感染拡大を阻止し、経済が概ね元の水準に戻るまでにはまだ相應の期間を要するものと予測されます。しかしながら、感染拡大が収まったとしても縮小した経済や人々の生活様式は完全に元の水準や状態には戻らないといわれています。

コロナ禍を乗り越えるためには、コロナ以前に戻るのではなくコロナに伴う人々の生活や意識の変化を真摯に見つめ、変化を俊敏に、かつ正確に捉えて対応策を講ずることが必要です。

コロナ禍は、私たちがこれからどのように日常を過ごし、本当に大切にすべきものは何か、という根本的な価値観を私たちに問い直す側面も持っているのではないのでしょうか。

企業にとって、コロナ禍は対応に苦慮する問題ではありますが、能動的に自らを作りかえる千載一隅のチャンスでもあると前向きに考えて事業の再構築に取り組んでいきたいものです。

今年は丑年、昨年の子年の繁栄を土台として、牛歩ではあるが地に足をつけ一步一步着実に物事を進めることが大切な年と考えますので、産学官が一致協力して宮城県の新しい未来を切り開く1年になるよう切に願っております。

弊財団は、今後も引き続き宮城県内のものづくり支援・企業家支援に尽力してまいります。皆様の一層のご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。新年のご挨拶といたします。